



ロストケア

2023年/日本映画
配給：東京テアトル、日活/114分

2023 (令和5) 年3月29日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本：前田哲
原作：葉真中顕『ロスト・ケア』（光文社文庫刊）
出演：松山ケンイチ／長澤まさみ／柄本明／鈴木央士／坂井真紀／戸田菜穂／峯村リエ／加藤菜津／やす（ずん）／岩谷健司

みどころ

少子高齢化が急速に進む今、老人介護問題は深刻だから、“ロストケア”はまさにタイムリー！しかし、模範的な介護士が42人もの介護老人を殺したことが明るみに出ると・・・？

世の中にはいわゆる“確信犯”なるものが存在するが、本作はまさにそれ。「殺したのではなく、救ったのだ！」と真正面から言われると、自白させた女検事もタジタジに……。さらに、自分自身の母親の介護状況と照らし合わせてよくよく考えてみると……。

興味深い問題提起だが、2人の“対峙”ぶりは、どう見てもアメリカの銃乱射事件をネタにした2組の両親の『対峙』（21年）の方が上。ましてや『羊たちの沈黙』（91年）で観たアンソニー・ホプキンスVSジョディ・フォスターの迫力ある“対峙”には、とてとても……。

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*

◆原作は、2013年に「第16回日本ミステリー文学大賞新人賞」を受賞した葉真中顕の『ロスト・ケア』。そのテーマは老人介護。主人公は介護士でありながら42人を殺めた男、斯波宗典（しばむねのり）だ。主演は斯波宗典役を演じる松山ケンイチと女検事・大友秀美役を演じる長澤まさみの2人。そんな“社会派エンターテインメント”と聞くと、こりゃ必見！

しかし、監督は、私がどちらかという敬遠（無視？）してきた『こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話』（18年）や『老後の資金がありません！』（21年）の前田哲監督だから、少し心配も。

◆冒頭に提示される、斯波の介護士としての働きぶりはとにかくすばらしい。後輩の女の子の“絶賛”を聞くまでもなく、絵に描いたような彼の働きぶりは、まさに介護士の理想像だ。しかし、世の中にこんなすばらしい介護士がホントにいるの？また、一人の老人の

介護に、斯波を含む3人のチームが同時に赴き、あんなに丁寧に介護してくれる姿は実態に合ってるの？

◆そう思っていると、ある日、介護老人の死体と共に、その犯人と目された訪問介護センター所長の死体が発見されたから、ビックリ。その事件を担当した検事の大友は、データ処理に優れた才能を持つ事務官のアドバイスを受けて、斯波が働く訪問介護センターでは、他と比べて介護老人の死亡率が異常に高いこと、彼が働き始めてから自宅での死者数が41名にもなっていることを解明。その事実を斯波に突きつけると、斯波はあっさり、あの介護老人の死亡は自分がニコチン注射を施した結果であることは認めたから、大友は大手柄だ。もっとも、そこでの斯波の主張は、「これは殺人ではなく、救いだ」ということだが……。

◆斯波が自身の犯行をすんなり認めたから、大友検事は一安心。もし否認されれば、斯波が42人もの介護老人を殺したことを一つ一つ立証するのはかなりしんどいはずだ。しかし、本作は誰が犯人か？というミステリーではなく、その殺人は介護で疲弊きった家族と本人を救うことだという斯波の論理を、大友がいかに論破するかという論点になっていくので、それに注目！

斯波が最初に殺した介護老人が自分の父親だったということは後に明かされるが、大友自身も老人ホームに入っている母親の認知症が近時、進行していることを心配していた。要するに、介護老人問題は人間の地位や立場を問わないということだ。『対峙』（21年）では、銃乱射事件の被害者となった少年の両親と、加害者となった少年の両親との“対峙”が興味深く描かれていたが、さて本作に見る被告人斯波と大友検事の“対峙”は如何に？残念ながらその出来には大差がある。3月31日付朝日新聞では、「長澤と松山との演技対決は、米映画『羊たちの沈黙』のジョディ・フォスターとアンソニー・ホプキンスをさえ思い出させる。」と書かれているが、私の目で見ると、そのレベルにはとてもとても……。

2023（令和5）年4月3日記